

# お風呂の最新動向

浴室技術専門委員会 葛西 裕 (TOTO株式会社)

## 1 はじめに

キッチン・バス工業会が創立されて半世紀、技術の発展や人々の暮らしの変化に伴い、住宅設備は大きな変貌を遂げてきた。浴室も同様で在来工法に替わってユニット工法が主流になるなど、技術的に大きく変化してきた。

また、生活文化の向上を反映して、使用者の浴室に対する要望も年々多様化しており、こうしたニーズに応えるべく、各社、商品開発に励んでいる。

本稿では、近年の浴室商品をさまざまな視点から、紹介しつつ、その最新動向について解説する。

## 2 社会環境の変化(省エネ・省資源)

商品動向を語る前に、我々の暮らしを取り巻く社会環境の変化についてふれておきたい。

とりわけ、省エネや省資源という言葉に象徴される温室効果ガス削減への取り組みが、住宅にも波及・拡大してきたことは大きな変化である。

住宅トップランナー制度の導入(2009年)、省エネ基準の改正(2013年)などがその一例である。特に後者では、従来の建築外皮の断熱性能だけでなく、初めて、住宅設備の1次エネルギー消費量の基準を定め評価することとした。

家庭でのエネルギー消費は、給湯が1/3を占め、さらに給湯エネルギーの過半は浴室で消費される。そのため、浴室廻りの消費エネルギー量を対策することは、温室効果ガス削減に大きな効果をもたらす。

こうした流れを受け、浴室に使用される設備機器についても、JISなどでエネルギー消費量の計算方法や性能基準が定められた。その結果、近年、家計のみならず環境にもやさしい省エネに配慮した浴室商品が次々と開発されている。

## 3 基本機能の充実と進化

### (1) 全自動給湯器の進化

入浴に欠くことができるのが給湯器である。現在

主流となっている全自動給湯器は、ボタンひとつで、ちょうど良い深さまでお湯張りするだけでなく、自動追い焚きや自動足し湯までの便利な設備である。こうした全自動機能は、いまや当たり前になった感があるが、機器のエネルギー効率を改善することでさらに性能が向上している。

2003年に基準エネルギー効率(トップランナー値)が施行されて以来、さまざまな方式の給湯器が効率の良さを競ってきた。潜熱回収型給湯器や電気式ヒートポンプ、燃料電池などに代表される高効率給湯器は、今後、さらに進化していくことが予想される。

### (2) 高断熱浴槽の登場

夜遅く帰宅してもすぐに温かいお風呂に入る浴槽として、2004年に発売されたのが高断熱浴槽である(図1)。特長は、浴槽の周囲を断熱材でしっかり覆い、断熱風呂フタでフタをすることにより、抜群の保温効果をもたらせたことである。

この商品の発売を契機として、JISにて「高断熱浴槽」の性能が定義され、その後、2010年の住宅エコポイントや2012年の低炭素住宅認定制度の中で、対象機器のひとつとして選定されたこともあり、普及が拡大している。

また、さらに、一步踏み込んで、お湯を保温するだけでなく、浴室全体をすっぽりと保温材で覆って、浴室の暖かさを逃がさないようにした商品も発売されている(図2)。

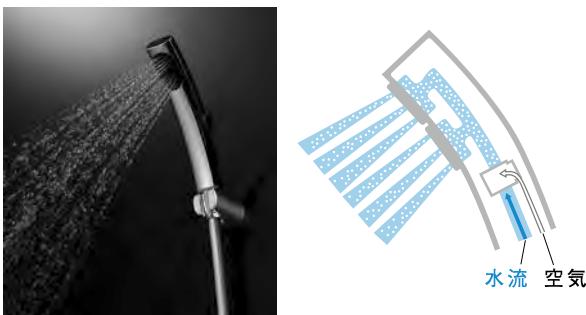


### (3) シャワー浴の普及と水栓の節湯化

夏のシーズンや、外出前など時間のない時は浴槽にお湯をためないで、シャワーだけ使用する人が増えている。特に、若い世代では急速に増加している。こうしたシャワー浴が増えている背景には、シャワー設備の充実とサーモ水栓の普及がある。

今やお風呂にシャワーは当たり前の時代になったが、シャワーの温度調節もサーモスタッフ水栓のおかげで手間取ることがなく、簡単かつ快適にシャワーを使えるようになっている。

また、近年では省エネにも配慮した気泡混入シャワーという商品が開発されている。これは、湯水に空気を含ませて湯水の1粒1粒を大型化し、たっぷりの浴び心地を体感できるだけでなく、肌の皮脂の汚れまでキレイにできるという優れた商品である。言うまでもなく、気泡を混入することで大幅な節水を実現している(図3)。



●図3 気泡混入シャワー

### (4) ユニバーサルデザインの普及

ユニバーサルデザインという考え方とは、すでに社会に広く浸透し、さまざまな商品や施設に適用されている。システムバスについても、2000年前後からこうした思想を取り入れ、入り口の段差解消、洗面器置台や手すりの設置、浴槽へ出入りの際の適正なまたぎ高さの設定などさまざまな工夫を施すことで、高齢者だけでなく、一般の人にも安全で使いやすい浴室になっている。

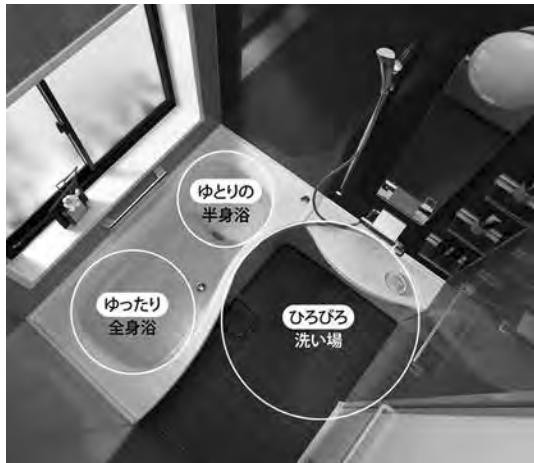
図4は、洗い場にベンチを設けた高齢者に使いやすく、家族のコミュニケーションの場として最適な浴室、図5は入浴時、シャワー時、半身浴時、それぞれで使いやすい空間形状を取り入れたデザインの例である。

### (5) 湿気の解消と浴室換気乾燥暖房機

浴室特有のじめじめ感を解消し、カラリとした浴室を実現したのが、2001年に発売された速乾機能付き床である。排水速度を意図的に遅くすることにより、



●図4 洗い場にベンチを設けたシステムバス



●図5 使いやすい空間形状を取り入れたデザイン

水滴を残さず排水させるという革新的なメカニズムにより洗い場の排水性能を格段に向上させた。

一方、浴室はお風呂へ入るための部屋という固定観念を覆したのが、浴室換気乾燥暖房機である。これは、浴室用換気扇と暖房・乾燥機が一体となったもので、浴室の換気を行って湿気を取り除くだけでなく、梅雨時など洗濯物が外に干せない場合に、浴室へ洗濯物を干して、乾燥運転させることで、翌朝には乾燥してしまうという便利な商品である。また、暖房機能もあわせもつため、寒い冬場の入浴前に運転しておくと浴室が適温に暖められ快適に入浴ができる。

さらに、換気、暖房、乾燥だけでなくミストサウナを楽しめる製品も発売されている。細かい霧状の温水により短時間で体の芯まで温まり、肌の水分量がアップすることから、若い女性を中心に好評を博している(図6)。



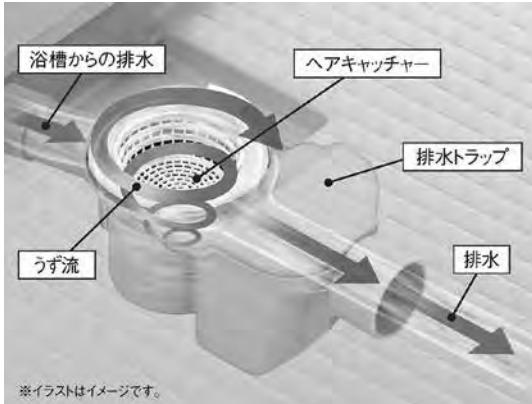
●図6 ミストサウナ

## (6) 清掃性・安全性への配慮

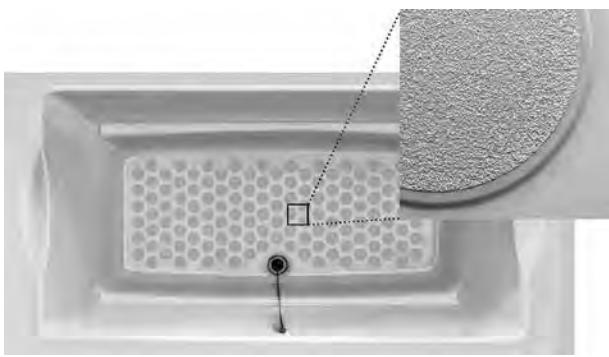
浴室は、毎日使うものだけにお手入れも大変である。ここでは、毎日のお掃除を楽にする工夫をいくつか紹介したい。

図7は浴槽の残り湯を利用して「うず」を発生させ、排水口にたまたまゴミをまとめて捨てやすくしたヘアキャッチャーを装備した排水トラップの例である。

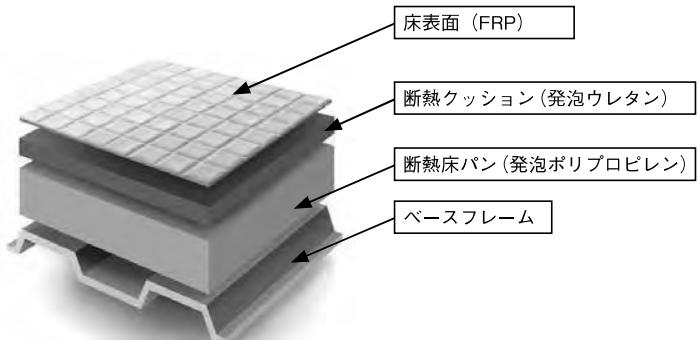
そのほかにも、水垢や皮脂汚れを落としやすい人工大理石浴槽や掃除しやすいトラップ、部材のつなぎ目が汚れにくく掃除しやすい目地など、清掃性に配慮した商品が多数発売されている。また、浴室は裸足で水や石鹼を使用するため、他の部屋に比べて、注意しないと滑りやすい。図8は浴槽底部に微細な砂目加工を施して、浴槽に入る際の滑りを予防した商品の例である。



●図7 清掃性に配慮したトラップ



●図8 浴槽底部の滑り止め



●図9 畳のような肌触りの床

## 4 終わりに

以上、近年のシステムバスの商品動向を紹介してきた。前章で述べたように、この10年、基本機能は省エネ技術を取り入れながら目覚しい進化をとげている。

一方、気泡浴槽や調光照明、浴室用テレビやオーディオなど、癒しやリラックスを狙いとした付加機能も徐々に受け入れられてきている。

さらに、床の構造から見直しをして、畳のような肌触りを実現した柔らかい床などのように、これまでにない快適さを追求したものも商品化されている(図9)。

こうしてみると、これから浴室は、「身体を洗う空間」はもちろんだが、「癒し・リラクゼーションの空間」をいかに実現するかがポイントのひとつとなりそうである。

今後も、引き続き基本機能のさらなる進化を目指すとともに、お客様により便利で快適な空間を感じてもらえるような新たな提案を続けていきたい。